

社会デザイン学会 ファイナンシャル・インクルージョン研究会

文献紹介 No. 3

『善意で貧困はなくせるのか？－貧乏人の行動経済学－』

D・カーラン & J・アベル著、清川幸美 訳、澤田康幸 解説

(みすず書房、2013年、324頁)

栗野晴子 (アイ・シー・ネット株式会社、オイコクレジット・ジャパン)

本書は、アジア・アフリカ・中南米のいろいろな国で、マイクロファイナンス（以下MF）や農業、教育、保健といった貧困削減のための「善意ある取り組み」を、開発経済学の最先端の手法で「何がうまくいって何がだめなのか」を検証し纏めたものである。その手法とは、人間がどのように選択・行動しその結果どうなるかを究明する「行動経済学」、客観的に効果を評価する「無作為化比較試験」、そして実験的な手法で研究する「実験的経済学」のアプローチである。

上記の手法では、貧困削減政策の実証研究で知られ「貧乏人の経済学」を執筆したデュフロ米マサチューセッツ工科大学（MIT）教授が有名で、本書の著者のカーラン米エール大学教授は、デュフロ教授の一番弟子である。しかし本書は、「貧乏人の経済学」とはまた違う、非常にわかり易く思わず引き込まれていくような内容になっている。本書が、著者の「経済開発という専門化したお堅い世界と、貧困問題に関心を持つ多くの人々とに橋をかけたい」という思いから始まり、「読者が世界に暮らす人々と向き合えるように」と執筆されたこと、現場での研究が「面白くて刺激に満ちた感動的な仕事」と言い切る、著者の貧困削減への熱い思いが伝わるからだろう。

本書は12章から構成され、MFに関する章が4、MFに言及している章も入れると半数の6になる。著者の途上国開発への経験がMFから始まっていること、貧困削減対策としてMFが注目されてきたためと考えられる。以下に、これら12章の概要と感想を述べる。

第1章「はじめに一僧侶と魚」では、貧困と戦うための二面戦略として「問題の理解」と「厳密な評価」を挙げる。貧困層が直面する問題に光を当て、彼らが何と闘っているかを理解し、可能性のある解決策を提案し、それが効果をあげるかを試すことが重要だと考えるからである。そして、貧困層の問題を理解するには、従来の経済学だけでなく、人間がどうして非合理的な行動を取るのかも考慮する「行動経済学」を使うことが必要であるとしている。

第2章「貧困と闘う－何をどうするのか」は、上記の二面戦略の一つ、「厳密な評価」の手法である「無作為化比較試験」について丁寧に説明している。これは、試験対象を治療群と治療を受けない対象群とにランダムに分けて効果を客観的に評価するものである。著者が、MF機関のインパクト評価のずさんさを知ってこの方法にたどり着いた経緯も描

かれていて、非常に興味深い。

第3章「買うーセーフティネットがある世帯を倍に増やす」は、貧困層に開発プログラムをどう売り込むかというマーケティングの問題を、マイクロ融資や農業保険の売り込み方法を例に説明している。援助では見逃されがちなテーマだが、「適切な方法でプログラムを提示し貧困層の参加率をあげることで成功率を高めることができる」という指摘は説得力がある。

第4章から第7章は、MFを取り上げる。第4章「お金を借りるータクシーの運転手はどうしてローンを利用しなかったか」は、表題のガーナでのタクシー運転手などがMF機関のマイクロ融資を利用しない理由に触れた後、南ア・フィリピン・インド・スリランカでの実証実験の結果から、マイクロ融資による貧困削減効果を考察している。実験の結果は、消費向け融資の有効性、男性の方が利益率が高いこと、比較的豊かな層の方が利益を上げビジネス意識の高い人や既に起業している人の方が事業に投資していることを示した。そして、「いくらかの人はマイクロ融資を利用して豊かになっているが全てではない」と結論づけ、「これまでマイクロ融資を誇大広告していたのではないかと疑問を投げかけている。「全ての貧困層が起業家ではなく、融資を必要としている訳ではない」という意見には説得力がある。筆者が述べているように、マイクロ融資が多くの人々に多くの選択肢を与えたことは評価しつつ、どのような場合に最も効果をあげているのかがもっと研究されるべきだろう。さらに、マイクロ融資が本当に貧困層のニーズに合った形で提供されているのかも検討されるべきと考える。

第5章の「幸せを求めるーもっと楽しいことがある」では、中南米3カ国での実験から、融資に加え事業についての研修や指導、特に売上の季節変動に備える戦略など実践的で具体的な指導や個別のコンサルティングを行った場合に利益が大きく伸びた例を紹介し、グラミン銀行創始者のユヌス氏の「全ての人は生まれながらのスキルを持っている」との持論を、ロマンティックな見方で間違っていると一蹴する。全ての貧困層が「偉大な起業家になる」ことを目指している訳ではなく、幸福を追求する仕方や能力や優先事項は人によって違うという当たり前のことを、マイクロ融資を熱狂的に推進する人々は忘れていているという指摘はもっともである。評者も、インドやアフリカで貧困女性の多くにインタビューしたが、全ての女性が事業を拡大したいと思っている訳ではなかった。水汲みなど家事の負担が大きい途上国の貧困女性にとって事業拡大は容易でなく、ある程度の収入が得られれば良いという女性も多いと考えられる。なお、本章の後半では、インドネシアでマイクロ融資の5割が消費目的に使われていた調査結果を紹介しており、人々の優先事項が異なることも考えると、融資の用途を制限するのは無駄ではないかと指摘している。

第6章の「力を合わせるー集団の欠点は？」は、グループのメンバーが互いの借入を保証するグループ連帯保証制度など、小口融資でのグループの効果を検証している。これまで、メンバー同士が返済に責任を持つからこそ、メンバーの選別や借入額や利用状況のチェックが行われ、グループの圧力もあって高い返済率が維持されると考えられてきた。しかし、筆者は、グラミン銀行自身が連帯保証の無い仕組みを導入し成功したことに動機づけられ、連帯保証のある融資とグループで集まって返済はするが連帯保証の無い個人融資を比較する実験をフィリピンで行う。そして、その結果は、両者の返済率に差は無く、個人融資の方がより多くの顧客を惹きつける、というものだった。また、ペルーでも

個人融資であっても文化的に同質でつながりの強いグループほど、お互いを効果的にモニタリングして返済率が高かった。インドでは毎週集まるグループの方が毎月集まるグループより返済率が高い。これらから、グループモデルはいくつかの点で機能しており重要だが改善できる方法があり、良い行動を促す要素を探した上で推し進めるべきだと結論づけている。評者がフィリピンで調査した時も、最大規模の CARD 銀行を含め、旧グラミン型の連帯保証制度からグループ集会は行うが個人に貸し付ける制度に転換している MF 機関が多かった。「その方が顧客数が伸びるから」と MF 機関の担当者は答えていたが、このフィリピンでの実験結果が影響しているのは間違いないだろう。

第 7 章の「貯める－楽しくない選択肢」は、まず、インド女性が月利 3% の短期を繰り返してやりくりしている例をあげ、背景に、わずかなお金も酒飲みの夫に取られて貯金できない現状を紹介する。そして、ケニアやフィリピンや米国で、無料で預金口座を開設できるプログラムや、目標額に達するまで引き出しできないコミットメント貯蓄、賃上げがある度に毎月の貯蓄額を増やすプランなど、貯蓄に関する実験結果を示している。これらの取り組みは成功し、フィリピンでは 6 ヶ月で預金残高が 47% 増加したほか、ケニアでは預金者の事業投資の増加や病気へのより良い対応という効果があった。貧困層には預金へのニーズがあり、効果も見込めることを示したのだ。そして、手持ちのお金を使う誘惑に負けないでいかに目標に向かって預金させるかの方法のほかに、定期的に貯蓄を思い出させる方法についても検討している。評者も、インドで現金を夫に取られないようカバンに隠していた女性や、アフリカで現金を缶に入れて土に埋めていた女性に会った。銀行など預金を動員できる MF 機関は、借入者より預金者の方が多い現状を見ると、途上国の貧困層の預金ニーズは大きいと言える。効果的な預金商品の開発にこのような研究が貢献することを期待する。

8 章「耕す－ゼロから何かを作り出す」は、ケニアとガーナの農業やインドの漁業の事例を紹介する。ケニアでは、生産向上に効果のある肥料を普及させるため、農民の資金がある収穫期に肥料購入のためのクーポンを販売し、次のシーズンに肥料を配布するプログラムを実施した。その結果、肥料の使用量は 50% 以上増加し、農民の収穫も増え売上も 50% 増加した。ガーナの農業は農民間での情報共有や拡散の状況を、インドの漁業は携帯電話を使って市場の価格情報を提供することで漁師の所得が増えた例を紹介している。途上国の貧困層の多くが従事する農林水産業だが、その課題は多様で複雑である。市場・法制度・インフラなどの基盤整備も必要だ。それでも、肥料クーポンや携帯電話の活用のように、やり方を改善し所得向上に貢献する支援方法があることを、本章は示している。他の事業向け融資と異なり、農業融資はインプットが必要な作付期と資金が回収できる収穫期という季節性に対応したサービスが必要だが、MF 機関も十分に取組んでいないので、この肥料プログラムのような試みは MF 機関でもぜひ検討してほしいと考える。

9 章「学ぶ－大事なものは学校に来させること」は教育問題を扱っているが、2 つの「驚きの大ヒット」例を挙げているのが特徴だ。一つはケニアの寄生虫駆除のプログラムで、小学生に虫下しの錠剤を無料で与え大きく出席率が向上しただけでなく、対象者の 10 年後の所得も多くなった。もう一つはインドで識字能力向上のためにリーディングキャンプをボランティアが運営するもので、参加した子供全員が字を読めるようになった。また、メキシコで始まり多くの国に普及している、子供が一定の出席率を維持したら親に政府が

現金を支払う「公的現金給付プログラム」も紹介している。ケニアやメキシコの例は他国にも普及しており、実験と厳しい評価という手法を使って効果のある方法を見つけ、それが他国でも使えることを示した例である。途上国の状況は先進国とは大きく異なり我々の既存概念は通用しない。特に、教育分野の解決策を見つけるには大きな網を張らないといけないため、「現場で試してみることが重要」という著者の意見には賛成である。

10章「健康を保つ―足の骨折から寄生虫まで」は、保健や水環境の改善のための取り組みを紹介する。途上国の貧困層はきちんと治療を受けられていないため診療所の充実などが取り組まれてきたが、それを利用してもらうことも重要だ。9章でも紹介したメキシコの現金給付プログラムは、公立の診療所を利用して予防ケアや保健教育を受けると現金をもらえるようにし、子供の病気の発生率の低下や家族の栄養の向上などの効果を上げた。このプログラムは世界6カ国に広がっている。一方で、ケニアで蚊帳を無償もしくは有償で配布するプログラムは両者での差が大きい。水を浄化させるための塩素を配るプログラムも、水源にディスペンサーを設置するなど効果的な配布方法は見つけたが、誰が費用を出すかは答えが出ていない。どちらも健康への効果は出ているので、費用の負担方法など、どのような方法がその地域で最も有効なのかを追求していかないといけないようだ。

11章「男と女のこゝろ―裸の真実」は、HIV/AIDSに関する取り組みを紹介する。まず、ケニアでは、少女達に年齢層別のHIV感染率を教えたところ、彼女達が性交渉の相手と無防備な交渉を減らし出産発生率が大きく減少した。一方、教師への研修は効果がなかった。マラウイでは、HIV検査プログラムに報奨金を組み込むプログラムを実施したが、これも効果がなかった。しかし、このような効果がなかった場合も、何に効果がないかを見極められたという点で重要だという。HIV予防にはどのような啓蒙活動やインセンティブが効果的かを見つけるため、新しいアイデアを出していくことが必要だと結論づけている。

最終章の12章「寄付をする―結論」は、貧困との闘いに多くの人々が参加する方法である「寄付」について、その対象組織を選ぶ時に「1ドル当たりの寄付に対する良い効果」を評価基準にすべきだと主張する。しかし、それは「効果が立証済み」のプロジェクトに支援を限るという意味ではなく、「効果を厳密に評価している」組織を支援すべきだとする。そして最後に、同書で紹介されたプログラムの中で筆者が特に興奮した7つのアイデアが挙げられている。「立証済み」のものも「立証中の段階」のものもあるが、下記に示したい。

- 1) マイクロ貯蓄： 特に女性の地位の向上に役立つ
- 2) お知らせメールで貯蓄を促す： 貧困層の貯蓄行動を促す安く効果的な方法
- 3) 前払いで肥料を売る： 肥料の使用を増やすのに簡単な方法
- 4) 寄生虫駆除： 低コストで効果が大きい
- 5) 少人数グループでの補修授業： 教師不足などの場合、学校制度の枠外のプログラムが効果的かもしれない
- 6) 塩素ディスペンサーできれいな水を： 安価で効果が高い下痢の予防手段
- 7) コミットメント装置： 目的達成のためにより良い選択がしやすくなる

このように、本書では多くの実証実験の事例が紹介され、効果のあったものもなかったものも含まれるが、それぞれ、人々が「やりたい、もしくはやらないといけないと判って

Fincl.sg

いてもできない」という非合理的なものも含む行動を分析し、その対策としての取組みを試し評価するという点で非常に興味深い。寄生虫駆除のプログラムなど安価で効果のある取組みが立証され広く普及しているというのは、この手法の有効性を示すもので、勇気づけられる。また MF についても、この手法により貧困層のニーズに合った、そして貧困削減に効果のある金融商品が開発されることが期待される。

ただ、無作為化比較試験による評価には、本書でも述べられている「限定した地域での実験結果が他地域でもそのまま適用できる訳ではない」という課題のほかに、「コストの高さ」や「意図的に支援を排除する対象を作ることの倫理的かつ政治的な困難さ」、そして「長期的なインパクトを計測することの困難さ」という問題が指摘されている。JICA でも、同評価手法はニジェールの教育プロジェクトで試験的に行われている程度で、全ての援助プロジェクトで同評価を行うのは不可能である。本書では触れられていないが、これらの課題も踏まえた上で、どのようにコストを負担しこのような実証実験が進められるのかも今後は示してほしい。また、マイクロ融資については、「一定の人々には効果があるが全てではない」という結果が出ているが、それで「効果が無い」と結論づける人々も多いように見受けられる。しかし、少額で開始するマイクロ融資が、所得や消費、そして女性のエンパワメントなどのインパクトを与えるかを評価するにはより長期的に調査すべきだと考える。